

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32642

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24730442

研究課題名(和文) インド北東部のエスニック運動とグローバル化の影響

研究課題名(英文) Impact of Globalization on Ethnic Movements in Northeast India

研究代表者

木村 真希子 (Kimura, Makiko)

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：90468835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本科研の研究成果は、インド北東部の紛争をグローバルな文脈に位置付けることにより、エスニック紛争の増加や民族間の衝突(民族浄化)といった1980年代以降の変化がこの地域特有の現象ではなく、他地域にもみられる現象であるということを示したことにある。特に民族間衝突は旧ユーゴやルワンダと同様の事例が多数発生し、多くの国内避難民が生じた。90年代後半より各地で停戦や和平協定が締結されたが、紛争が平和的に解決されたものは少ない。最も古くから続くナガ独立運動の担い手である民族組織との包括的な和平協定が交渉中であり、この結果が今後のこの地域の趨勢を左右する可能性がある結論づけた。

研究成果の概要(英文)：This study reveals that the increase in the number of ethnic conflicts in Northeast India, especially clashes emerging among ethnic groups, is not unique to the region and should be understood in the context of global change. In particular, many of the clashes between different ethnic communities are similar to those that took place in the former Yugoslavia and Rwanda, and have led to the displacement of millions of villagers in the region. The Government of India (GoI) has concluded ceasefire and peace agreements with several armed groups since the latter 1990s, but very few have achieved peace on the ground. Right now, the organization leading the oldest Naga independence movement in the region is negotiating a final settlement with the GoI, the result of which will impact the overall situation of conflict resolution in Northeast India.

研究分野：社会学

キーワード：エスニシティ 南アジア 社会運動 グローバリゼーション インド北東部

1. 研究開始当初の背景

(1)1980年代から2000年代にかけて、インド北東部においてエスニック運動が活性化し、武装化して自治や独立を要求する組織や、他民族を攻撃する民族間衝突が激増した。この地域は山岳地域の少数民族を中心に自治や独立要求の絶えない地域だが、1980年代後半以降の運動は武装化の度合いやエスニックな権利要求の先鋭化という点で、従来の運動とは大きな変化が見られた。

(2)インド北東部のエスニック運動 / 紛争に関する研究は、1970年代までの山岳地域における自治権要求については包括的な研究が存在する。しかし1980年代以降の運動に関しては、個々の運動についてすぐれた研究は散見されるものの、包括的に取り組んだ研究は少ない。北東部のエスニック運動全体を網羅しようと試みたものは、ジャーナリストによる著作がほとんどである。1980年代後半の北東部のエスニック運動活性化の背景と構造に関する研究が望まれている。

2. 研究の目的

1980年代後半以降のインド北東部の運動は、それまでの運動と比較すると下記の3つの点が特徴的である。エスニックな起源をさかのぼり、一定の領土における自治を主張している。武装化する集団が多くなり、1990年代には20以上の武装化した民族組織が存在した。民族間の衝突、ときには民族浄化とも呼べるような他民族の排斥を目的とした攻撃が始まった。こうした現象に関して、既存の個別の事例に関する研究を手がかりとしつつ、北東部全体に共通する構造や背景、そしてインドの国内外のさまざまな要因、特にグローバル化による政治・社会的変化、および2000年代からの急速な経済成長の影響を分析することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)先行研究の整理と検討

本研究では主に以下の3つのタイプの先行研究を収集し、整理・検討を行った。最初のタイプは1980年代以降の紛争に関する理論的な著作で、これはメアリー・カルドーの「新しい戦争」論(Kaldor 2012)や低強度紛争(LIC)に関する議論(加藤 1993)、またUnconventional Warfareに関する議論等が存在する。さらに、関連する領域として民族浄化(ethnic cleansing)や強制移動、国内避難民等に関する著作に関しても代表的な著作を参考にした。

2つ目は北東部の紛争全般に関するもので、これらはHazarika(1995)、Bhaumik(2006)、Prabhakara(2012)など主にジャーナリストによる著作があげられる。北東部の紛争に関しては、1990年代の紛争の一番激しかったころにジャーナリストによる取材によっていくつものすぐれた著作が登場し、紛争指導者

へのインタビューを元に実態に迫っている。これらの報告では武器の入手や資金源などについて詳しく調査してあるものも多く、北東部の紛争の形態の変化を把握する上で貴重な情報が得られた。

3つ目はボドランド紛争やナガランド紛争など、具体例として調べた紛争に関する先行研究である。具体例に関しては下記の現地調査で得られた情報が多いが、先行研究を検討することによって現地調査を補完した。

(2)現地調査

本研究では、ボドランドにおける民族間衝突を事例として取り上げ、その現地調査に多くの時間を割いた。まずは紛争の直接の体験者ということで、避難民キャンプに暮らす紛争の生存者への聞き取りを優先した。ほか、避難民を支援するNGOスタッフ、行政関係者、政党指導者や学生団体の指導者等にもインタビューを実施した。

一方、ナガランド州とマニプル州では2015年の枠組み協定の進展に関する反応を知るため、民族組織や学生団体の指導者、派閥間の和平協定の取り組みを進める仲介者等に対するインタビューを実施した。また、マニプル州ではダム建設によって村を追われたナガの人々の居住地を訪問、聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1)北東部の紛争のグローバルな文脈における位置づけ

1980年代後半以降のインド北東部のエスニック運動は、平野部のアッサム州におけるアッサム統一解放戦線(ULFA)、ボドランド分離州要求を皮切りに、アッサム州の丘陵部や隣接州などへ広がっていく。同時に、それまで山岳州で起こっていたナガランド独立運動も再活性化し、グローバル化による新たな条件の中で従来とは異なる運動の性格を持つようになっていく。具体的には、隣接地域の複数の民族が一つの政党 / 組織を作って協力していた70年代までと異なり、エスニックな要求に基づいて組織が分かれ、またそれぞれが武装化していったこと、さらに一般人を標的とする多くの民族間衝突が起き、大量の国内避難民が発生した。

こうした北東部のエスニック運動の性格の変化については、これまであまり議論されてこなかった。しかしこれらは、世界の他の地域で同時期に発生した多くの紛争、特に東欧や旧ソ連圏、中央アジア、アフリカで起きた紛争と同様の傾向が指摘できる。80年代から90年代以降のグローバル化による紛争の影響として、よく知られているものとしてメアリー・カルドーの「新しい戦争」論がある。カルドーは、ある特定のアイデンティティを通じた権力の追求(アイデンティティ・ポリティクス)という新しい政治の目標、民族浄化と関連して大量虐殺や強制移住、住民

の追放といった新しい戦争行為の様式、そしてグローバル化された戦争経済という3つの特徴を通して、80年代以降とそれ以前の戦争の形式が変化したと論じた。

こうした議論を通じて北東部の紛争をグローバルな文脈に位置付けることにより、北東部における1980年代後半以降のエスニックな紛争の増加や性格の変化はこの地域特有のものではなく、グローバル化の影響ととらえることが可能になる。さらに、本研究で重要視する民族間衝突についても、東欧や旧ソ連圏、アフリカ、中央アジア等で起きた紛争と比較することが可能となる。

北東部における紛争は、国際的な介入がなく、紛争解決に国際的な監視の目が行き届いていない。そのため、政府の裁量に任される部分が大きく、時の政権の利害に左右されて解決が長引く傾向がある。こうした限界が、(2)や(3)で扱う民族間衝突の再発や和平合意の行き詰まりといった点に表れている。以下、それぞれの点について事例を通じて詳細な分析を試みる。

(2) 民族間衝突発生メカニズムと和解

インド北東部では1990年代以降、民族間の衝突が頻発した。1993年のマニプル州におけるナガ・クキ紛争とアッサム州におけるボド・ムスリム紛争を皮切りに、1996年にはボド・アディヴァシ紛争が、2004年にはカルピ・ディマサ紛争と続いた。

こうした紛争は単独で起きるわけではなく、自治や独立を求めたエスニック運動と連動して起きることが特徴である。また、武装組織の襲撃がきっかけとなるが、多くの場合近隣の村人も参加する集合的暴力、いわゆる暴動の形態をとる。これらの衝突は、政府との停戦合意が締結された後、最終的な和平協定を交渉中に起きることが多い。紛争解決後の権力の分配や領土確定をめぐる紛争が勃発することが目立ち、代表的な事例はボドランド自治評議会の管轄領域をめぐるおきた1993年のボド・ムスリム紛争である。

ボドランドはこれ以降も紛争が継続したが、1996年以降の特徴は選挙に関連して紛争が起こることにある。選挙に関連して集合的暴力が起きるとするのは他地域のインド政治と共通している。自治や独立を求めた闘争が国内政治の文脈に取り込まれていく過程と位置付けることができるだろう。また同時に、紛争地特有の武装解除の不徹底などが背後にあることも挙げられる。

民族間衝突について現地調査を実施した成果としては、こうした紛争ではどちらのエスニック集団にも多くの避難民を出し、被害者と加害者の線引きが難しいということである。ボドランドの場合、アディヴァシやベンガルに出自を持つムスリムなど、移民側に被害が多く、彼らに対する民族浄化とみなされる傾向が強い。しかし、ボドの人々も長年の移民や制度的欠陥による土地喪失に苦し

み、それがボドランド運動への支持につながった。また、紛争による被害はボドの方が少ないものの、確実に存在する。そのため、「自分たちこそが被害者である」という感情も根強く、こうした感覚がまた次の攻撃への温床となっていく。ボドと移民集団の間の分断を乗り越えるための市民的努力も存在するが、いまだ両者の間の溝を埋めることは困難な状況にある。

(3) 紛争の継続と平和的解決への見通し

北東部の紛争は1990年代後半以降、停戦合意に至り解決に向けた話し合いが始められることが多く、中には和平協定に至ったものもある。しかし、和平協定に至ったものの暴力が再発したボドランド、直後に新たな武装組織が結成されたトリプラのように、実際には暴力が継続している事例が少なくない。また、アッサム州独立を要求したULFAや、ナガ独立運動をけん引してきたNSCNなど、停戦合意後和平協定に至らず、最終的な解決が図られていないケースも多い。北東部における武装組織の影響力は落ちたものの、これらの州は政治的安定とは程遠い状況に置かれている。

本研究では、ナガ独立運動を中心に検証し、ナガランド州、マニプル州及び周辺州への影響を考察した。ナガ独立運動最大の武装組織であるナガランド社会主義民族評議会(NSCN I/M)とインド連邦政府は1997年に停戦合意を結んだが、その後和平に向けた会談は停滞した。その原因は、政権交代による行き詰まり(インド国民会議派政権が対話に熱心ではなかった)、周辺州/民族からの反対(特にマニプル州のメイティ民族からの反対)、

内部での派閥間争いの3点に求められる。しかし、2015年8月、最終的な解決を目指した枠組み協定がNSCN(I/M)とインド連邦政府との間で締結されたというニュースが報道された。実際は大枠に合意したのみで、詳細についてはまだ協議中ということで2年間が経過した。現在は上記の指摘した派閥間の争いの調整段階に入っており、予断を許さない状況であるが、もし包括的な協定が締結されれば今後の地域の趨勢を左右することが期待される。

(4) 経済のグローバル化

急激な成長を遂げるインド経済の影響を受け、インド北東部でも水力発電事業や資源採掘など、大規模な開発計画が実施されている。こうした事業がエスニックな運動に果たしてどのような影響を及ぼすのかという問題意識の下、文献調査とマニプル州のマピテル・ダムに関する現地調査を実施した。結果としては、現時点でこうした大規模開発が新たなエスニック紛争の火種となる事例は今のところ報告されていない。むしろ開発計画反対運動や抗議運動の中で、エスニックな境界を越えて団結する事例も見られた。しかし

こうした大規模開発計画は新たな避難民を発生させるため、今後も注意の必要なテーマである。

なお、当初の計画では予定していなかったものの、北東部の紛争と経済のグローバル化というテーマでは、戦争経済の成立という観点からの調査が可能であり、本研究に重要であったという点を研究期間後半で認識した。具体的には、それぞれの民族組織の資金源を支える活動や、小型武器の違法取引の増加により、紛争の数自体が増加したという観点である。また、これらに関連し、ミャンマー・タイ・中国と続く違法な麻薬取引等の経済活動も紛争の分析には欠かせないテーマである。しかし、これらの点に関しては現地調査が難しく、またすでにジャーナリストによる優れたレポートがあるため、文献調査や信頼できるジャーナリストへのインタビューによって補足した。

<引用文献>

Bhaumik, Subir, *Troubled Periphery: Crisis of India's North East*, 2009, New Delhi: Sage, 305.

Hazarika, Sanjoy, *Strangers of the Mist: Tales of War and Peace from India's Northeast*, 1995, New Delhi: Penguin Books, 388

Kaldor, Mary, *New and Old Wars: Organized Violence in Global Era*, Third Edition, 2012, Cambridge: Polity, 268

加藤朗、『現代戦争論』、1993、中公新書、239

Prabhakara, M. S., *Looking Back into the Future: Identity and Insurgency in Northeast India*, 2012, New Delhi: Routledge, 286

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

木村真希子、「インド・アッサム州ボドランドの森林地におけるエスニック紛争と国内避難民」、『国際関係学研究』、査読無、第43号、2017、pp.47-58

Kimura, Makiko, 'A Fluid Homeland: Erosion, Displacement and Life in the Char-Chapori Areas of Assam', Lipokmar Dzuwichu, G. Amarjit Sharma, Manjeet Baruah ed., *Fixity and Fluidity: History, Politics and Culture of North East India*, Jawaharlal Nehru University, 査読無、2016、pp. 122-132

木村真希子、「森林の不法占拠者による民衆の政治」、『法学研究』、査読無、89巻2号、2016年、pp.415-445

木村真希子、「暴力の連鎖 二〇一二年アッサム暴動」、『地域研究』、査読有、15巻1号、2015年、pp.68-80

木村真希子、「トライブ運動の個別化」、石坂晋哉編著『インドの社会運動と民主主義 変革を求める人々』、査読無、昭和堂、2015、pp.200-218

木村真希子、「北東部の声」、長崎暢子・堀本武功・近藤則夫編著『現代インド3 深化するデモクラシー』、査読無、東京大学出版会、2015、pp.101-105

Kimura, Makiko, 'Ethnic Conflict and Violence Against Internally Displaced Persons: A Case Study of the Bodoland Movement and Ethnic Clashes', *International Journal of South Asian Studies*, 査読有、Vol. 5, 2013, pp.113-129

〔学会発表〕(計21件)

木村真希子、「国家への反乱から国境を越えた先住民族ネットワークへ ナガの独立運動と人権運動に見るゾミアの人々の現在」第24回ゾミア研究会、京都・京都大学、2017年3月19日

Kimura, Makiko, 'Displacement and Ethnicity in Bodoland, Assam, Seminar series at Department of Humanities and Social Sciences, Indian Institute of Technology, Guwahati Campus', Guwahati, Indian Institute of Social Sciences, 2017年2月22日

Kimura, Makiko, 'Enduring Conflict in Bodoland: Riots and Encroachment by Forest Dwellers in Assam, India,' 5th Conference of the Asian Borderlands Research Network, Kathmandu, Annapurna Hotel, 2016年12月12日

木村真希子、「ナガ枠組み協定をめぐる現状」グローバル化のなかのインド「州」政治：開発・環境・暴力をめぐる全28州の比較分析研究会、松山市・愛媛大学、2016年10月2日

Kimura, Makiko, 'Violence and Displacement in the Forest Areas of Bodoland, Assam,' Centre for the Studies of Northeast India, Jawaharlal Nehru University Seminar Series 2016, New Delhi: Jawaharlal Nehru University, 2016年9月9日

木村真希子、「インド北東部：アッサム州におけるエスニック紛争／運動について」、笹川平和財団研究会、東京・笹川平和財団ビル、2016年6月27日

木村真希子、「河岸浸食と河川地域を移動する人々：アッサムにおけるムスリムをめぐるポリティクス」、「現代南アジアにおける法と権利の動態をめぐる研究 国制・権利・法秩序」科研費研究会、金沢市・金沢大学、2016年1月30日

木村真希子、「森林の不法占拠者による民衆の政治」、「少数民族の「多様なやりとり」にみる現在の「ゾミア」地域-異なる政治経済体制下での比較研究会」、東京・麻布台セミナーハウス、2015年11月7日

Kimura, Makiko, 'Protesting Militarization in Indian Periphery', 9th International Convention of Asia Scholars (ICAS 9), Adelaide, Adelaide Convention Centre, 2015年7月8日

Kimura, Makiko, 'From a Naga Nation to an Indigenous People: A Struggle for Independence and Indigenous Rights Movement in Asia', Convention of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 幕張・幕張メッセ、2014年5月17日

木村真希子、「国際人権レジームとマイノリティへの暴力 インド北東部を事例に」、「現代インド地域研究」国内全体集会、東京・東京大学、2013年11月24日

Kimura, Makiko, 'Surviving the "Out of Control" Situation: Ethnic Violence and Domination in Bodo Areas in Assam, India', Anomie in Asia Workshop (Organized by Moving Matters Research Group, University of Amsterdam, The Netherlands), 京都・京都大学、2013年11月16日

木村真希子、「再燃する暴力 2012年ボドランド暴動」、津田塾大学国際関係学研究所研究懇談会、2013年10月17日

Kimura, Makiko, 'Beyond India-Burma Border', Friday Colloquium (Organized by Tata Institute of Social Science), Guwahati, Tata Institute of Social Science, 2013年8月30日

木村真希子、「インド北東部の社会状況と今後の支援について」、2013年度第一回インド・南アジア討論会(国際協力機構南アジア部主催)、東京・東京 JICA 本部、2013年6月

24日

Kimura, Makiko, 'A Fluid Homeland: Erosion, Displacement and Life in the Char-Chapori Areas of Assam', National Workshop organized by the North East India Studies Programme, School of Social Sciences, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, Jawaharlal Nehru University, 2013年3月19日

木村真希子、「誰が暴動を起こすのか？ 農民の反乱からならず者の政治へ」シンポジウム：アジアの市民社会と国家の間 民主主義は有効か、京都・京都大学、2013年1月12日

木村真希子、「マニプル州：軍事化と女性による抵抗運動」、インド州政治科研 2012年度第3回研究会発表、京都・京都大学、2012年11月25日

木村真希子、「南アジアの紛争地におけるマイノリティ女性への複合差別」日本国際政治学会ジェンダー分科会発表、名古屋市・名古屋国際会議場、2012年10月20日

Kimura, Makiko, 'Memories on Japanese Soldiers: Narratives on World War II in Naga Villages', 3rd Conference of the Asian Borderlands Research Network: Connections, Corridors, and Communities, Singapore, National University of Singapore, 2012年10月12日

②木村真希子、「環境のガーディアンか、森林の破壊者か：アッサムの森林地帯における先住民族『不法居住者』の事例より」、現代インド研究東京外国語大学拠点第2回若手研究者セミナー、東京・東京外国語大学本郷サテライト、2012年7月7日

〔図書〕(計 2件)

Kimura, Makiko, *The Nellie Massacre of 1983: Agency of Rioters*, 2013, New Delhi: Sage, 168

上村英明、木村真希子、塩原良和、『市民の外交』、2013、法政大学出版社、205

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

木村真希子 (KIMURA, Makiko)

津田塾大学・学芸学部国際関係学科・准教授

研究者番号：90468835

- (2)研究分担者
なし
- (3)連携研究者
なし
- (4)研究協力者
なし